

序 奏

村教育委員会としてもですね、昨今の財政難で齊熙^{さき}芸術家協会への出資はできかねまして、来年度よりは、まあ、先生にお願いしております評議員も三月三十一日付けを以てご解任とさせていただくと云うことで、はは、よろしゅうございますよね。ご理解いただけたのですよね。はい、では、これで失礼いたします。先生におかれましても益々ご小説の方がご成功されることをご祈念させていただきます」

協会とは齊熙郡内の町村教委が協力して創った財団法人であった。たまたま界限に書家、画家、作家、彫刻家、音楽家などが多く在住するところに狙いをつけられ、芸術の祭典やら講演やらのイベントで村おこし町おこしを図ろうと目論まれ、五年前に設立されたものである。官公庁主導の芸術振興活動など似非だと蔑んでいたものの、年二回の評議員会で出される謝礼金と交通費との他、催しがあれば一封ありと云うささやかな愉しみも先にはないのかと感慨頻りで、帰庁する文化課職員の見送る心にも幾許かのもの悲しさを禁じ得なかった。

新人賞受賞後は少々騒がれたものの、以来鳴かず飛ばずで原稿依頼のないこの頃、ないよりましの援けであったのに。

自作の原稿が認められず、売れないのは実に空しい。何せ、受賞作の原案が小学校六年生のときに聴いた級友の創作文だったからである。受賞は自力の成果だと思っている。いくらのユニークな発想があっても、読ませる文章力がなければ成就する筈はない。でも自分で零から創るとうまく行かない。他人のアイデアをいじる方がよく逝く。奇抜に驚嘆させられるし、語りも自在で滑らか、興趣を醸すよう練れる。

椀に茶甕を廻し、抹茶を点てた。

床に置かれた香炉からなさない煙が揺れている。香豆花入れに目を遣る。手元に眼を落とす。金欄^{きんらん}の裂地^{きれ}で作った仕覆^{しふく}には棗が入っている。濃茶だからだ。棗に濃茶を入れるようにしたのは利休の案らしい。

土壁へと目を動かした。ざらつきを眺める。にじり口が引き開けられたままだった。庭を観る。飛石と雑草と湿った土しか見えない。龍安寺の石庭を想った。砂礫や岩の枯山水。同時に雪舟の山水図、破墨山水を思い出す。

二十七歳の五月であった。

そう言えば小生が「不死です」と言ったら、あの役人、聞かなかったかのように本題に話を戻したな。無理もない。彼は小生ではない。小生の経験を知らない。かく言う由来が彼にはわからない。

またあれが見たくなった。茶室を出て母屋に入り、父の書斎を抜けて代々の書庫の戸を外し、床板をきしませ、棚から桐の箱を下ろす。書斎に返して端坐し、箱を置いた。

小生の知り合いにロシア系アメリカ人と日本人とのハーフでイワン・斉・イワノヴィッチ・イワノフ・与那家よなやと云う画家がいる。隣村の薙久養なぎくさに住み、父親は禪宗と墨芸ひとし術とに興味を持って来日した研究家であった。その同名の父イワン（ロシアでは父の名をミドル・ネームにする習慣がある。イワノヴィッチとはイワンの息子ということである。なお、イワノフとはイワン家を意味する）が遺した千数百点の書蹟の一つを三年前に譲り受け、こうして大事に保管している。今は、

紫の緒を紐解く。

『昆廬燕那』と筆されていた。言わずと知れた大日如来、マハー・ヴィルシャナの音字である。

音字であれば漢字的には無意味であった。で、気持ちがよいわけだが、茶陶と同感ではない。比すれば墨跡は人為である。だが人も自然の一つであり、人為も自然の現象であり、墨と云うのも自然物であって、また歳月とともに経年変化が積み重なり、人為が薄れるにつれ、陶磁器同様に人手の痕跡がある分、却って外部であることが際立つように思えて飽きない。

また曰くつきであれば感慨も深い。

イワンから電話が来たのはちょうど二年前であった。

「真兮まこ、おまえ、俺の父さんの書をどうした」彼は十三歳年上であった。小生はイワン・斉さんと呼んでいる。

『どうしたって、何で急にそんなことを訊くんですか』

「生涯の宝にするって言ったよな」

「確かに」

「それで、それはどこにある」

「いや、その。芸術の為に芸術の誇りを持って本質的に実存イデア エクシステンツしています」

「どう云う意味だ、それ。完全にちぐはぐだよ。」

おい、インターネット上でオークションに出されていんだぞ」

「そんなばかな、あれは」

「何だ」

「そんな筈がありません」

「事情がありそうだな。話してみろ」

「春堅はるがたを知っていますか」

「一九二〇年代ぶったあのきざな男か」

「齊熙真神村に住むコンセプトチュアル・アーティストです」

「何が。俺は世界のどこでも奴の作品など観たことがないぞ」

「もつとも。これから創るのです」

「話が見えてきたよ。資金協力の要請があつたんだな。それで墨書を処分か。要するに同じことだ」

「違います。彼は知り合いの然るべき愛好家に預けて金を借り、出世払いで必ず元に戻すと言つたんです」

「で、そう言つた奴は今どこにいる」

「最近、連絡を取っていません。資金集めに奔走したり、諸手続きや準備をしたりで忙しいだろうと思つて」

「俺が耳に挟んだ話だとはいぶ前に女を連れて村を出て、それつきりらしいぞ」

「女！ 待つてください、そんなこと信じられません」

「やれやれ。顛末が見えて責める気にもならないな。具体的な現象はわからないが、様子はつかめるよ。おまえは女に騙され、春堅の罠にかかり、時価十数万円の品を盗られた。そういうことだ」

「綾あやの言葉が嘘だつたなんて。あり得ません」

「あり得ないのではない。認めたくないだけだろう。辛いことかもしれないが、越前の壺でも鑑賞するつもりで事実を観照してみろよ。」

と言つても今は無理か。時間が解決するのを待つしかない、それに関してはな。おい、黙つていちゃいかん。そんなにいい女だったのか」

「哲学や芸術への深い感性と行動の情熱を持った女性でした」

「ほう。見事だね。ふ。俺が訊いているのはオブジェ」

「オブジェ！」

「じゃ、ルックスと言おう」

「・・・薔薇の花弁のような睫毛に縁飾られた眼の目尻が切れ上がり、その大きな眸には無数の表情の海が含まれ、翳りと鮮やかさを同時に湛えていました」

「想像もつかんような目の持ち主らしい」

「白くて明晰な肌の色彩や質感には、神域の古代杉の大木の群の霧のような、数千年前の砂漠の遺跡のような非地上的な香りがありました」

「妖怪だな」

「ロマンティズムが理解できないようですね」

「おまえ、絶対女にもてないよ。言い寄ってくる異性は全部詐欺師だと思っていいぞ。それでそいつに何と言われたんだ」

「彼女とは龍吞神社で出会いました。去年の暮れです」

「一番金が欲しい時期だ」

「楠木の傍らに立って見上げながら右手で幹に触れていました」

「あのなあ」

「小生は、思わず声をかけました」

「何しているんだって、誰でも訊きたくなるよ。実際、そうするかどうかは別にして」

「『このあるがままが崇高な精神、神性を持った芸術なのよ』 素晴らしいことです。心から驚きました。現実こんなことが言える人がいるなんて」

「驚いて当然だ。俺たちは廃業だな」

「綾は言いました。

『あなたにはわかるのね。』

ねえ、ほら、少し奥に湧き水があるでしょう。あそここの楓の枝を見て。それに檜の木が。それがそれとして存在すると云うことが魂なのよ。

向こうに行ってみない？』

彼女と小生とは鎮守の森をお山の方に向かって進みました」

「怪しいと思わなかったのか。おまえ、よくこどもの頃人攫いに遭わずに済んだな」

「しばらくの間は枯葉を踏み、木々を眺め、その木膚に触れ、山や岩や小さなせせらぎを楽しみました。

『畝邨村の三和畝山を知っている？』
ほむら みわうね

『知っていますよ。貞観正國寺の聖域です』
じょうがんしょうこく

『あそこはここよりもっと神聖たわ』

『そう思います』

『ねえ、私の知り合いで、あの山そのものでコンセプトリアル・アートをやろうとしている人がいるのよ。会ってみたい？』

その日のうちに齊熙真神の喫茶店で春堅を紹介されました」

『貞観正國寺って、それ、俺の女房の実家だぞ。義理の弟が住職なんだ。勝也がそんな企画を許すと思うか。』

まあいい、それで金が足りなくてときりげなくほめかされたわけだ」

『お見込みのとおりです。』

いくらでもよいのですがと言われても小生も金がなく」

『親のすねを齧る職業作家だからな。それで唯一換金可能な私有財産を差し出したんだ』

『車も貯金ありませんから。でも小生としては貸したつもりだったのです。』

申し訳ありませんでした」

『もういいさ。おまえにあげたんだから、本来的には俺もどうこう言える筋合いじゃない。まあ、できる限り頑張ってオークションで落として見せるぞ。』

ところで奴は三和畝をどうやってアートにするつもりだったんだ」

『どうもしません。あるがままです』

『それじゃ、前から同じことじゃないか。何にもならんぞ。それで何で金がかかる』

『山の半分にクリムゾンレッドの布をかけるのです。あたかも美しい作品に掛けたボールを全取り去ろうとする瞬間のように。そう見えるようなめくれ方をさせ、たるみや皺を作る、と云う計画でした』

『建物や橋を巨大な布などで蔽うアーティストがいるぞ。一番煎じじやないのか』

『はく』

『つまりおまえはその後も緩とは会っていたんだな』

『そのとおりです。二回ほど。お茶と食事だけでした』

『いつから会っていない？』

『二月十五日から』

『どうして』

「連絡が取れないのです」

「どう思っていたんだ、そのことを」

「自由な気まま人ですからどこかへ出向いたのだろうか。いつか帰って来ると信じていました」

「おまえが春堅と綾とが村を出て行ったことを今知ってショックを受けられるのが俺には不思議だよ。とうに勘づいてよい筈だぞ」

「愚かでした」

「くよくよするな。後でそっちに行くから志野陶でも磨いていろよ」

電話を切る音がギロチンの大刀の落ちるように感じられた。

落胆は甚だしかった。裏切られ、愛を喪い、大事な品物をも奪われてしまったのだ。気がつくとい白い志野釉の茶碗を磨いていた。触感を楽しむうちに涙がこぼれてきた。綾、騙されたとわかって心はいく度も彼女のことを廻って、どこかにわずかも愛情の兆しが無かったかを執拗に探した。

何もない。

小生が無意識的に想いを滲ませる雰囲気醸すときでさえ、綾の双眸は色彩を移ろわせ、会話を転調させた。

札入れの締切日はその二日後で、イワンから電話があった。

「落札できなかったよ。あんな物に七〇万円も出すばかがいやがった。まあいいさ。俺は気にしていないよ」

小生は家業を手伝うようになった。骨董屋である。田畑は親族が食べる分しか耕さない。婆様と一緒にそれも為した。帳簿のつけ方を学び、親父に目利きを教わった。曾祖父時代から陶磁器を扱うことが多かった。

梅雨もやがては落葉の季節となり、古陶を磨くことに深く心を凝らすようになって行く。商売で扱いながらもお手製茶掛の曾祖父は儉約家であったが祖父は浪費家で、茶席に坐ったこともなかったのに仕事抜き道楽で茶器を集めてはその辺に転がし、気紛れに手にして愛でる人であった。

赤穂浪士の討ち入りの日、勘定台の下に火鉢を置いて店番をしていた。壺の龍文を戯れに模写したり、瀬戸黒を磨いたりしながら虚脱していると、ガラス戸が引かれ、父隆俊がたかとし風を巻き込みながら雪を帽子やコートに雪を満載して店内に入ってきた。小生は背筋を震わす。この時期には珍しく降り頻っていた。外の夜陰にぼうと白い。父は包みを抱えてい

た。

「真今、これを見てみる」

父が包装を解いた。

信楽であった。